

## 地元のことを知る旅 その2

## 南柏井の今と昔を歩く

新年のひと休みから抜け出して、今年の第一歩として隣町である南柏井の散歩を試みることにした。柏井浄水場の南西側に突きあたる直線の道路は、穴川を経て千葉の町中に繋がっているが、1945年までは軍用鉄道が走っていた。軍用鉄道が走る前は、この辺りは犢橋村から大和田方面へ抜ける里道がいくつも走っていたらしい。

南柏井村は江戸時代には上杉氏の所領で、花見川をはさんで対岸の北柏井村は小栗氏の所領だった。明治に入って二つの村が合併して柏井村となり、千葉市柏井町となった。

軍用鉄道の線路を思い浮かべながら南西（検見川方面）に向かうと、信号のある交差点に出る。

**●石尊大権現** <https://yahoo.jp/E6hW2x>

交差点を右（西北西）に進むと、二股の角に小さな塚がある。飾りだけのような四段の石段の上に建つ石塔に刻まれている文字を読むと、中央には「石尊大権現」、右側に「大天狗」、左側に「小天狗」。この地で大山詣が行なわれていたことを示すものである。大山詣が盛んになったのは江戸時代で、大山（阿夫利神社）から勧請されて各地に石尊大権現が祀られた。

大天狗は大山の奥社、小天狗は前社を意味している。石塔には日付が刻まれていないので、残念ながら建てられた時代はわからない。一年前には藪に埋もれていたが、伐採や草刈りが行なわれた結果、塚の全貌がわかるようになった。塚の中に何かがあるのか、塚の示すものが何かは、調べてみたがわからなかった。塚の前を通る道は、柏井の集落を経て大和田に通じる里道になっていた。

**●大杉神社** <https://yahoo.jp/LbCTQE>

石尊大権現の塚を右手に見送って150mほど西に歩くと、南柏井の集落に向かう小道の先に鳥居が見える。鳥居には大杉神社と書いてある。

小さいながらも鞘堂に守られた社がうやうやしく建っており、周囲の草むらはいつ来てもきれいに手入れされている。

社殿の左側には「仙元宮」「馬頭観世音（文化10年）」「庚申塔（嘉永元年）」「青面金剛王（文化9年）」の四つの石塔が建ち、木の根に寄りかかるように砕けた山の神が埋もれていた。

「仙元宮」は「浅間」であり、富士信仰があったことを示すものである。

「馬頭観世音」と「青面金剛王」に刻まれた文化9年頃は、11代将軍徳川家斉の時代。また「庚申塔」に刻まれていた嘉永元年（1848年）は、12代将軍徳川家慶の時代になる。庚申塔は、庚申信仰によるもので、三年18回の講を達成すると石塔を建てるという慣わしがあったそうである。

「青面金剛王（しょうめんこんごうおう）」も庚申信仰に関係するもので、民間信仰として浸透した庚申講の本尊とされていた。「馬頭観世音」も庚申信仰との接点を持っており、一連のものと思われる。

社殿の右側には、出羽三山講の記念碑が並んでいる。

この小さな村から富士山へ、大山へ、出羽三山へと信仰の旅がいくつも行なわれていた。遠距離の旅をいくつもこなしていたということだけでも充分驚きに価する。

**●南柏井の出羽三山信仰**

帰宅後インターネット上で、「南柏井」「大杉神社」等をキーワードとして探してみたら、「県立博物館デジタルミュージアム」というサイトに「南柏井の出羽三山講」という情報が見つかった。

千葉県は出羽三山への信仰が盛んな地域と言われていた。「男は一生に一度は三山に行くもの」とさ

れており、山に集る先祖の霊を供養し、山を巡ることで生存中に死後の世界を体験し、穢れに満ちた体を清浄にして蘇ることができる、と考えられてきた。三山登拝を住ませた男は「行人」として講の中心メンバーとなり、地域の安泰や豊作を祈願する行事に参加する。

同年代でまとまって一度だけ出かける地域では終了後に石碑を建てるが多く、頻繁に出かける地域では「梵天供養」という行事を行なう時に石碑を建てるなど様々。

そして「行人」たちが行なう祈禱の行事のために「梵天」という出羽三山信仰の標とも言うべき飾り物が作られる。

南柏井では、もう講は行なわれなくなったが、最後に講に参加した者によって慣習は続けられており、3月の天道念仏で梵天を飾って供養を行なうらしい。

色梵天は、藁づとに半紙を巻き、赤黄緑青紫の五色の色紙で幣束を作り、25本の幣束をつとに差して、集落の入口に飾る。

白梵天は、半紙を半分にして作った幣束を25本差す。幣束が付いた藁づとを真竹の先に差し込んで、花見川の岸辺に飾る。

各世帯に小幣を配り、門口に飾り、木枠で作った「棚」と言われるものに33本の梵天を立てて飾り、皆で酒を酌み交わす。

往時は、講が終るとこのような儀式を行なって、近所の大杉様(村のはずれの大杉神社)に記念碑を建てるということが慣わしとなっていたようだ。

大山詣・富士登山・出羽三山詣・庚申様などなど、様々な信仰を通じた行事が暮らしの中に存在しており、そういった行事を通じて地域の結束・人材育成・人格形成なども図られてきた。今の時代からは想像もつかないことではあるが、各地でこのような行事が継承されているのも事実である。時代が大きく変りすぎて、継承が困難になっている話も数多く耳にするようになってきた。

\*参照情報:南柏井の出羽三山講

[https://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/bonten/08\\_minamikasiwai.html](https://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/bonten/08_minamikasiwai.html)

<https://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/bonten/index.html>

## ●大杉神社とは？

さて、ではこの地の大杉神社の由緒・由来が気になるわけだが、境内には説明板は何もない。

村はずれの大きな杉の木の下にあった小さな祠に名を付けて大事に守ってきたものなのか、それとも誰かの何かを祀ったものなのか、帰宅後に調べても何もわからなかった。やむなくインターネットで広く「大杉神社」全般を調べてみたら……

全国に670社ほどある大杉神社の総本宮と言われる「大杉神社」が見つかった。

<http://oosugi-jinja.or.jp/>

茨城県稲敷市にあり、牛久沼・印旛沼・手賀沼などがまだ海の中だった時代に、常陸内海が入り組んだ半島の先端であった場所で、律令制度以前の時代には菟上之国(うなかみのくに)と言われ、水運物流の拠点だった。(のちに海上と記されるようになった)

神社の境内にあった杉の巨木が航海の目印になっていたこともあり、海上の安全の守り神として崇められるようになった。

神護景雲元年(767年)に、下野国二荒山を目指して大和国を旅立った勝道上人がこの地に来ると、病苦にあえぐ民衆がいた。上人が傍らの杉の巨木に祈りを捧げたところ三輪大明神が杉に乗り移り、病魔は治まったという言い伝えがあり、それまではこの地の地名「安婆嶋」から「あんばさま」と呼ばれていたが、大杉大明神と言われるようになった。

延暦24年(805年)に境内の一角に安穩寺が開基されて、明治になるまで大杉神社がこの寺の別当になっていた。

文治年間に、常陸坊海尊が登場し、大杉大明神の数々の奇跡を果たしたことから、大明神の眷属である天狗が表舞台に出るようになり、天狗信仰が加わることになった。

「安婆嶋」、「あんばさま」は地名として残り、大杉神社があるこの地は稲敷市阿波(あば)と言う。

その結果、「安婆嶋」「阿波島」「阿波崎」などの地名や人名が誕生したらしい。

南柏井の大杉神社とのつながりは見つからなかったが、大山信仰と天狗信仰という接点が多少気になる。あるいは大杉大明神信仰で古代に遡ればつながっていたのか、柏井という地名の由來說の中に「古代の入江で船着場」だったこと意味するという説もあるようなので、もしかしたら・・・と想像を広げたところで、「大杉神社調べ」は一旦締めくくることにした。

### ●南柏井の集落

大杉神社から里道を西へ歩くと南柏井の集落に入る。ここからは「斎藤」という表札が続く。

萱葺屋根の上に銅葺きを施したような家や蔓を誇るような立派な家が目立つ。

門前に「坂東・秩父・西国・四国巡拝記念」と刻んだ大きな石板が門口に建つ家があった。碑文を読むと、坂東(昭和55年)・秩父(昭和53年)・西国(昭和50年)・四国(平成2年)の巡拝を記念して平成3年に建てたものだった。 <https://yahoo.jp/Ruag6K>

### ●柏井分教場跡

集落よりも一段高い岡のような畑地の一角に南柏井公園と看板が建つ平地がある。

公園の看板に寄り添うように建つもうひとつの看板の説明によると、

明治31年(1898年)に集落の中程の泉蔵寺に柏井分教場ができ、昭和5年(1930年)にこの場所に移った。昭和22年(1947年)に犢橋小学校柏井分校と改称し、1年生から3年生までがここで学んだ。4年生になると犢橋小学校まで歩いた。

昭和43年に花見川団地ができて、分校は廃止になり花見川第二小学校に通うことになった。

四方の見晴しが良い岡の上は、遠景が楽しめる校舎を思い浮べることができる。

### ●稲荷神社 <https://yahoo.jp/6LASAy>

集落の中を抜けていくと左手に稲荷神社の鳥居が現れた。鳥居を潜り抜けると右手の大きな石板に

昭和13年に稲荷神社・大杉神社の遷宮

もうひとつの石板には、こんなことが刻んであった。

昭和40年に両神社の鳥居・上屋・神楽殿の新築を行ない

町内会館を新設した

神社の境内に建つ石仏の数から、数多くの講が行なわれていたことがわかる。読み取れるもので最も古いものは天保年間(1830年代)のものだった。

一段小高い頂に建つ二つの社殿を拝んで、稲荷神社を辞した。

### ●川口邸 <https://yahoo.jp/XKsSXG>

集落の間を抜けると谷沿いに回り込んで柏井橋の袂に出る。

角に「川口」という表札がある庄屋を思わせるような立派な作りの家がある。大正時代の地形図を見ると、周囲を囲むように土塁のマークが書かれているので、昔は砦か城かがあったと思われる。正面の門の脇に小さな祠と鳥居が建っているが、風化してしまい鳥居の文字が読み取れない。

### ●泉蔵寺跡 <https://yahoo.jp/MXQG2Q>

県道に出て南に向かうと何軒か廃屋もある。時の流れに抗うこともできなかった家もあったし、生き残って続いている家もあるということのようだ。

県道の脇に思いがけない広さの平坦地があるので入ってみた。敷地の奥に建つ建物は南柏井町内会館の看板が下がっていた。広い敷地の手前側には古い墓石や石碑が建っており、奥の方にはさらに古い墓石が並んでいる。

一番手前の石碑には「観世音拝礼供養塔」と書いてあり、最上部に「西国・秩父・坂東」と付記されている。その隣にはコンクリートの広い台座の上に古い墓石を並べてある。

さらにその奥へと進むと、平成30年に建てた石碑に、こんなことが書き記されていた。

川ホリ人足の墓石(右側面) 天明3年・・・

無縁精霊供養塔 寛政元年・・・

六十六部回国供養塔 明和5年・・・

印旛沼から東京湾に流れる新川・花見川は、江戸時代から数度にわたって開削工事が行なわれてきたが、戦後になってようやく完成した。享保・天明・天保の三度の工事の内天明の工事で亡くなった川掘り人足の墓石や供養塔が南柏井に残っている。のちに天保期の工事の死者も合わせて供養してきた。この度、関係する石碑をここに集めて、工事の歴史を後世に伝える、工事で犠牲になった方々への感謝と供養をすることにした。

前述(稲荷神社の項参照)の様に、南柏井町内会館ができたのは昭和40年、それまではここに泉蔵寺という寺があった。

敷地の奥の方に古い墓石が建ち並ぶ一角があったが、墓石を見ると全てが「斎藤家」で、もう文字が読み取れないし、掘られた仏像の形もわからない。泉蔵寺を終う時に残ってしまった墓石なのか、斎藤家の墓石だけが残ったのだろうか。

前述の様に、南柏井に住む人の殆どの姓は「斎藤」だが、全てが血縁なのか、只の同姓だけなのかはわからない。

ある時には村の分教場の役割も担った「村の寺」は、村の歴史の語り部であったと想像する。何かもう少しわかると面白いのだが、この旅はこのあたりで終ることにした。

以上

